



## 【4月の気象】

▷ 松山における4月の平均気温の平年値（1981～2010年）※を見ると、4月上旬の12.8℃から下旬の16.2℃へと1か月の間に3.4℃も上昇します。この時期は、雨量が少なく、空気が乾燥し、火災の発生しやすい気象条件となることが多くなります。風が強いときは、火の回りが早くなるため、火の取り扱いには特に注意が必要です。



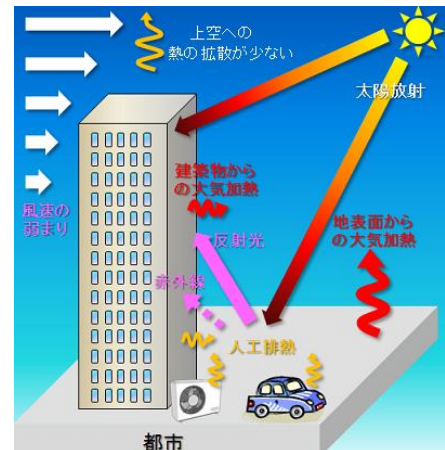
※ 2021年5月19日からは新平年値（1991～2020年）の使用を開始する予定です。

- ▷ 低気圧が日本海を発達しながら東へ進むときは、南よりの強風に注意が必要です。また、低気圧からのびる寒冷前線の通過時には大気の状態が不安定となりますので、強雨、雷、竜巻などの激しい突風、降ひょうなどの現象にも注意が必要です。
- ▷ 四国付近を低気圧が通過後、中国大陸から高気圧が張り出して冬型の気圧配置となる場合は、気温が大きく下がり、「寒の戻り」となることがあります。2020年4月12日には、西日本の南岸を低気圧が発達しながら北東へ進んだ後、翌13日は寒気が流入し、愛媛県の山地で降雪や積雪がありました。
- ▷ 移動性高気圧に覆われて晴れた朝は、放射冷却により気温が下がるため、山間部を中心に晩霜に注意が必要です。

## 【気象用語】「ヒートアイランド現象」とは

ヒートアイランド（heat island=熱の島）現象とは、都市の気温が周囲よりも高くなる現象のことです。気温の分布図を描くと、高温域が都市を中心に島のような形状に分布することから、このように呼ばれるようになりました。

この要因としては、都市の産業活動や社会活動に伴う人工排熱とアスファルトやコンクリート等などの人工被覆域からの輻射熱が考えられます。自然の草地、森林、水田、水面等は人工被覆域と比べて保水力が高いことから、水分の蒸発による熱の消費が多く、地表面から大気へ与えられる熱が少なくなるため、主に日中の気温の上昇が抑えられます。一方、人工被覆域は植生域と比べて熱容量が大きく、日射による熱の蓄積が多いことから、日中に蓄積した熱を夜間に放出するため、夜間の気温の低下を妨げることになります。さらに、建築物の高層化及び高密度化が進むと、天空率が低下し地表面からの放射冷却が弱まること、また、風通しが悪くなり地表面に熱が滞留しやすいことから、ますます気温の低下を妨げることになります。

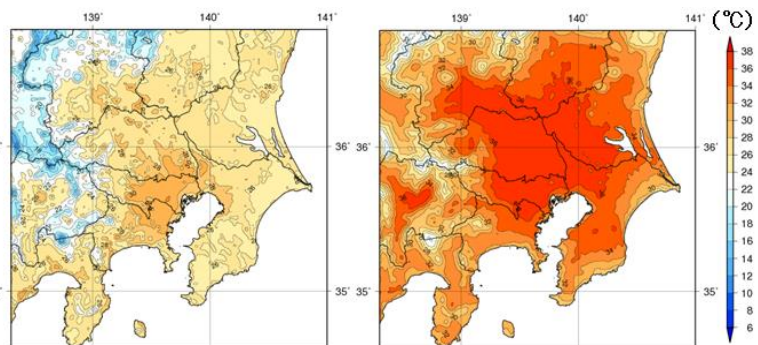


都市化の進展に伴って、ヒートアイランド現象は顕著になりつつあり、地球温暖化と併せて、熱中症等の健康への被害や、感染症を媒介する外来生物の定着など生態系の変化が懸念されています。

ところで、愛媛県における都市化の影響はどの程度なのでしょうか。

この100年の年平均気温は地球温暖化により上昇していますが、都市化の影響を受けにくい日本各地の15地点

の平均で約1.5℃上昇しているのに対し、例えば松山では約1.8℃上昇しています。おおよその見積もりとして、この気温上昇の差である0.3℃ほどが、この100年の松山の都市化による気温上昇と考えることができます。



2013年8月11日05時(左)と15時(右)の関東地方の気温分布図

朝、日中ともに東京都市圏を中心に高温域が広がっている

詳細は[ヒートアイランド現象](#)のページをご覧ください。